

いわき市・楡葉町・富岡町

———戻りたい、戻れない———

2011・3・11の東日本大震災・津波そして原発事故で今でも10万人の人々がふるさとに戻れないでいます。しかも原発事故の原因者である東電・政府は誰ひとりも責任を取らない。

なのに、政府は「居住制限区域」(23000人)「避難指示解除準備区域」(31800人)を遅くとも2017年3月までに解除し対象地区の住民への慰謝料の支払いを2018年3月までで一律終了しようとしています。しかも避難指示区域以外の避難者への無償住宅供与を2017年3月で打ち切る方針をも出しています。まるで福島は終わってしまったかのごとく帰還政策を強引に進めようとしています。



富岡駅周辺

「20msvを避難帰還の基準とすることは問題。せめて1msvに下がるまで早期の帰還をやめ賠償や住宅支援を継続すべき」との声がある中、いわき市・楡葉町・富岡町を視察しました。

いわき市からマイクロバスで視察。ホテル前は $0.11\mu\text{sv/h}$ でしたが楡葉町の天神岬では $0.18\mu\text{sv/h}$ 、富岡町の富岡駅前には $0.23\mu\text{sv/h}$ そして富岡の商店街は $0.5\mu\text{sv/h}$ 、桜並木は $2.07\mu\text{sv/h}$ 、帰還困難区域と居住制限区域の境では $2.3\mu\text{sv/h}$ と除染が終わっているところでもすべてが $0.23\mu\text{sv/h}$ 以下になっているわけではない現状がはっきり見てとれました。

富岡駅周辺は去年は2011・3・11のときに時間が止まっているかのような状態でしたが、今年3月すべてを撤去して何も無い状態になっていました。これからコンパクトタウンを造るとのこと。

でも放射線管理区域(5msv)より高い線量の20msvを基準にして住民に戻れと言ってもなかなか戻れないのが実情。

今回の視察で説明をしてくれたと富岡町の住民の言葉「家の中にネズミが入ってしまっているし、雨漏りでそれを修繕するにもお金がかかり、建て直しても戻ってくる人が何人いるか・・・」の中に人々の苦しみを感しました。

街中には多くの除染のフレコンパックがあり、指定廃棄物の最終処分場も造られる。目の前には福島第二原発の大きな煙突が見え、そして福島第一原発の汚染水・廃炉がどうなるか分からない状況でどう心を整理して戻ってくるのか？

地域分散型の復興の街づくりが必要なのだが、5年間の間に創りきれずにコンパクトタウンと言う外形だけを求めても活力ある街になるのだろうか？

行政も議会も住民もこれからの社会をどう作っていくかが問われています。

いわき市にある「認定NPO法人たらちね」は食品の放射能測定だけでなく、ホールボディカウンターによる内部被曝の測定・甲状腺のエコー検査・精神サポートなど医師の協力を得て“民間初の医療検査センター”を造ろうと準備してました。

福島の実情の一端を見ただけでも“福島は終わっていない！”。問題を解決せずに再稼働・原発輸出を進めるアベ政治は許せません。